3-10 機構共通研究施設（分子科学研究所関連）

統合バイオサイエンスセンター

木 下 一 彦（教授）（関連分子科学第一研究部門兼務）

A-1) 専門領域：生物物理学

A-2) 研究課題：

a) 一分子生理学の立ち上げ：一個の分子機械の機能と構造変化の直接観察

A-3) 研究活動の概略と主な成果

a) たんぱく質ないしRNAでできた分子機械はたった一分子で見事な機能を発揮する。その仕掛けを探ることが我々の研究目標である。分子機械は確率的に働く（次の瞬間に何をするのかをサイコロを振って決める）ため、複数の分子機械の動きを同期させることができない。したがって、どうしても個々の分子機械の働く所を直接観察し、必要なら1個1個の分子機械を直接操作する必要がある。我々は、光学顕微鏡の下で「生きた」分子機械を相手に解析を続けている。主な成果として、回転分子モーターF₁-ATPaseの回転の一分子観察方法を種々開発し、回転機構の基本原理を解明しつつある。同モーターにつき一分子蛍光エネルギー移動を利用した解析を行った結果、知られている結晶構造がATP待ちの状態ではなくそこから角度にして40度ほどずれた構造をとっていることが示唆された。

B-1) 学術論文

K. ADACHI, H. NOJI and K. KINOSITA, Jr., “Single Molecule Imaging of the Rotation of F₁-ATPase,” *Methods Enzymol.* **361B**, 221–227 (2003).

R. YASUDA, T. MASAIKE, K. ADACHI, H. NOJI, H. ITOH and K. KINOSITA, Jr., “The ATP-Waiting Conformation of Rotating F₁-ATPase Revealed by Single-Pair Fluorescence Resonance Energy Transfer,” *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* **100**, 9314–9318 (2003).

B-4) 招待講演

木下一彦, 「たんぱく質一分子でできた回転モーター」, 第9回ナノ・バイオテクノロジー研究会, 名古屋, 2003年2月.

木下一彦, “Chemo-mechanical Coupling in a Rotary Molecular Motor Revealed by Single-Molecule Physiology,” FNB2003 ナノ・バイオ融合テクノロジー国際シンポジウム, つくば, 2003年3月.

木下一彦, 「一分子生理学から学んだ化学 力学エネルギー変換の仕組み」, 日本顕微鏡学会 2003年度シンポジウム 分子レベルの顕微鏡学, 京都, 2003年3月.

木下一彦, “Chemo-mechanical Coupling in the Rotary Motor F₁-ATPase,” 第19回国際生物学賞記念シンポジウム, 奈良, 2003年12月.

木下一彦, 「たんぱく質一分子でできた回転モーター」, 分子ナノテクノロジー第174委員会, 京都, 2003年12月.

木下一彦, 「F₁-ATPaseの回転機構: ATP駆動のたんぱく質分子機械が働く仕組み」, 第26回日本分子生物学会年会, 神戸, 2003年12月.

K. KINOSITA, Jr., “Chemo-mechanical Coupling in F₁-ATPase Revealed by Single-Molecule Physiology,” 2003 Winter Conference on Biophysics The Biophysics of Single Molecules, Aspen (U. S. A.), January 2003.

K. KINOSITA, Jr., “Single-Molecule Studies of the Rotary Mechanism of F₁-ATPase,” Keystone Symposia, Keystone (U. S. A.), February 2003.

K. KINOSITA, Jr., “Single-Molecule Physiology,” 1er Seminaire Transalpin de Physique, Lausanne (Switzerland), March 2003.

K. KINOSITA, Jr., “Chemo-mechanical Coupling in F₁-ATPase Revealed by Single-Molecule Physiology,” 225th ACS National Meeting, New Orleans (U. S. A.), March 2003.

K. KINOSITA, Jr., “Chemo-mechanical Coupling in F₁-ATPase, A Rotary Motor Made of a Single Protein Molecule,” Chairmen of the European Research Councils Chemistry Committees, Gothenburg (Sweden), April 2003.

K. KINOSITA, Jr., “Mechano-Chemical Coupling in F₁-ATPase,” Bionanotechnology Euroconference on Biomolecular Devices, Granada (Spain), July 2003.

K. KINOSITA, Jr., “The rotary mechanism of F₁-ATPase studied by single-molecule physiology under an optical microscope,” 9th International Workshop on “Single Molecule Detection and Ultra Sensitive Analysis in the Life Sciences,” Berlin (Germany), September 2003.

B-7) 学会および社会的活動

文部科学省、学術振興会等の役員等

日本学術会議生物物理学研連委員.

B-8) 他大学での講義、客員

慶應義塾大学理工学部, 客員教授, 「生物物理学」, 2001年4月 - .

早稲田大学理工学部, 客員非常勤講師「総合生命理工学特論」, 2001年9月 - .

C) 研究活動の課題と展望

分子モーターの働きを説明する理論的モデルの構築を試みる予定である。

青野重利(教授)(相関分子科学第一研究部門兼務)

A-1) 専門領域：生物無機化学

A-2) 研究課題：

- a) 一酸化炭素センサータンパク質 CooA の構造と機能に関する研究
- b) 酸素センサータンパク質 HemAT の構造と機能に関する研究
- c) 新規な気体分子センサータンパク質の単離とその性質の解明

A-3) 研究活動の概略と主な成果：

- a) これまでの研究においては、紅色非硫黄光合成細菌中に含まれる転写調節因子 CooA が、一酸化炭素を生理的なエフェクターとして利用しており、一酸化炭素存在下においてのみ、転写活性化因子としての活性を獲得する新規な転写調節因子であることを明らかにしてきた。本年度は、好熱性一酸化炭素酸化細菌 *Carboxydothemus hydrogenoformans* 中に、これまで研究対象としてきた CooA のホモログタンパク質が存在していることを明らかにした。本ホモログタンパク質の大量発現系の構築に成功し、その精製法の確立を行った。精製した CooA ホモログは、これまでの CooA 同様、分子中にプロトヘムを含むヘムタンパク質であることが分かった。本 CooA ホモログの活性中心の構造、反応機構を遺伝子工学的的手法および物理化学的手法を用いて検討した結果、これまでの CooA とは微妙に異なった活性中心構造を有していることが明らかになりつつ有る。
- b) 枯草菌中に含まれる HemAT は、本細菌の酸素に対する走化性制御系において酸素センサーとして機能するシグナルトランスドューサータンパク質である。本年度は、HemAT による酸素センシング機構の解明を目的とし、各種アミノ酸変異体を調製し、それらの性質に関し、詳細な検討を行った。その結果、HemAT 中にふくまれるヘムの遠位側ヘムポケットに存在する 70 番目のチロシン、ならびに 95 番目のトレオニンが酸素センシングに重要な役割を果たしていることを明らかにした。HemAT が関与するシグナル伝達機構の解明を目的として *in vitro* 活性測定系の構築も試みている。本系は、センサーとして HemAT、HemAT からシグナルを受容するシグナル伝達タンパク質として CheA および CheV タンパク質から構成されている。これらのタンパク質に、系統的にアミノ酸変異を導入し、変異導入による活性の変化を詳細に解析、検討することにより、シグナル伝達機構の解明を試みている。
- c) 新規な気体分子センサータンパク質として、*S. aureus* 中に含まれる NreB タンパク質を対象とした研究を行っている。NreB は、2 成分情報伝達系を構成するセンサー型ヒスチジンキナーゼであり、その分子中に特徴的なシステイン含有配列を有していることから、鉄硫黄クラスターを含む鉄硫黄タンパク質ではないかとの予想をたて、NreB 大量発現系の構築を行なった。予備的な検討では、発現した NreB は鉄硫黄タンパク質に特徴的な電子吸収スペクトルを示すことが明かとなった。このことから、NreB 中にふくまれる鉄硫黄クラスターが酸素センサーの活性中心として機能している可能性が高いと考えられる。鉄硫黄クラスターが気体分子センサーの活性中心として機能している例は、これまでにほとんど知られておらず、NreB が新規な性質を有する気体分子センサーであると考えられる。

B-1) 学術論文

H. SAWAI, N. KAWADA, K. YOSHIKATO, H. NAKAJIMA, S. AONO and Y. SHIRO, "Characterization of the Heme Environmental Structure of Cytoglobin, a Fourth Globin in Humans," *Biochemistry* **42**, 5133–5142 (2003).

B-3) 総説、著書

S. AONO, "Structural and functional properties of the CO sensing transcriptional activator CooA," *Proceedings of 3rd International Conference on Oxygen and Life*, Yuzuru Ishimura, Ed., *International Congress Series*, **1233**, 243–249 (2002).

S. AONO, "Biochemical and biophysical properties of the CO-sensing transcriptional activator CooA," *Acc. Chem. Res.* **36**, 825–831 (2003).

青野重利, 「一酸化炭素センサーとして機能する転写調節因子CooAの構造と機能」, *Molecular Medicine* **40**, 160-164 (2003).

青野重利, 「一酸化炭素による遺伝子発現制御」, *バイオサイエンスとバイオインダストリー* **61**, 37–38 (2003).

B-4) 招待講演

S. AONO, "Regulation of gene expression by CO: Structure and function of the CO-sensing transcriptional regulator CooA," The 1st International Congress on Bio-Nanointerface (ICBN 2003 TOKYO), Tokyo (Japan), May 2003.

S. AONO, "Structure and function of the heme-based sensor proteins," 8th Eurasia Conference on Chemical Sciences, Ha Noi (Vietnam), October 2003.

S. AONO, "Structure and function of the heme-based sensor proteins," First International Symposium on Biomolecular Chemistry, Awaji (Japan), December 2003.

青野重利, 「気体分子センサータンパク質の構造と機能」, 日本化学会第83回春季年会, 東京, 2003年3月.

青野重利, 「CooAタンパク質による外部信号受容と遺伝子発現の制御」, 日本学術会議シンポジウム「情報の創造と伝達における分子構造論」, 東京, 2003年6月.

青野重利, 「気体分子センサータンパク質による生体機能制御: COセンサー-CooA, O₂センサー-HemATを例として」, 第30回生体分子科学討論会, 京都, 2003年6月.

B-7) 学会および社会的活動

学会誌編集委員

J. Biol. Inorg. Chem., Editorial Advisory Board (2002-).

C) 研究活動の課題と展望

これまでの研究において、一酸化炭素、酸素などの気体分子が生理的なエフェクター分子として機能するセンサータンパク質が、ヘムを活性中心として含む、これまでに例のない新規なヘムタンパク質であることを明らかにしてきた。今後は、これらのヘム含有型センサータンパク質を始めとし、気体分子センサー機能を有する新規なセンサータンパク質の構造・活性相関の解明を目指して研究を進めたい。

藤 井 浩 (助教授) (分子スケールナノサイエンスセンター兼務)

A-1) 専門領域：生物無機化学、物理化学

A-2) 研究課題：

- a) 酸化反応に関与する金属酵素反応中間体モデルの合成
- b) 磁気共鳴法による金属酵素の小分子活性化機構の研究
- c) ヘムオキシゲナーゼの酸素活性化機構の研究
- d) アミノ酸の位置特異的ミューテーションによる酵素機能変換

A-3) 研究活動の概略と主な成果

- a) 生体内には、活性中心に金属イオンをもつ金属酵素と呼ばれる一群のタンパク質が存在する。これらの中で酸化反応に関与する金属酵素は、その反応中に高酸化状態の反応中間体を生成する。この高酸化状態の反応中間体は、酵素反応を制御するキーとなる中間体であるが、不安定なため詳細が明らかでない。酸化反応に関わる金属酵素の機能制御機構を解明するため、それらのモデル錯体の合成を行った。モデル錯体を -80 度においてメタクロロ過安息香酸で酸化すると、緑色の錯体に変化することを見いだした。この錯体は低温においてのみ存在でき、酵素反応中間体のモデルになると考えられた。種々の測定から、配位子が酸化されたカチオンラジカル状態にあることがわかった。
- b) 自然界にある窒素や酸素などの小分子は、金属酵素により活性化され、利用される。活性中心の金属イオンに配位した小分子は、配位する金属イオンの種類、配位子構造によりその反応性を大きく変化させる。このような多様な反応性を支配する電子構造因子がなにかを解明するため、磁気共鳴法により研究を行っている。金属イオンやそれに配位した小分子を磁気共鳴法により直接観測して、電子構造と反応性の関わりを解明することを試みている。銅イオンに配位した一酸化炭素の ^{13}C -NMR を検討した。その結果、 ^{13}C -NMR シグナルを観測でき、その化学シフトと電子状態との相関を明らかにすることができた。
- c) 金属酵素が作る反応場の特色と機能との関わりを解明するため、ヘムオキシゲナーゼを題材にして研究を行っている。ヘムオキシゲナーゼは、肝臓、脾臓、脳などに多く存在し、ヘムを代謝する酵素である。肝臓、脾臓の本酵素は、胆汁色素合成に関与し、脳に存在する本酵素は情報伝達に関与していると考えられている。酵素がもつ反応選択性の機構を明らかにするため、代謝中間体の異性体を化学的に合成した。それらと酵素との反応から各代謝過程における選択性を明らかにすることができた。また、反応選択性に酸素分子活性化機構が関与することがわかった。
- d) 酵素は、高い反応選択性を示すことがよく知られている。活性中心近傍のアミノ酸残基を新たに設計することにより、酵素の反応選択性を人工的に制御できないかを検討している。本年度は、ヘムオキシゲナーゼの反応選択性の機構をもとに、その反応選択性の変換を試みた。酵素の立体構造をもとに活性中心近傍のアミノ酸残基のミューテーションを行い、反応場の再構築を行った。その結果、反応選択性を人工的に制御することに成功した。ある種のバクテリアの酵素では、設計どおりの活性中心の再構築ができ、反応選択性をほぼ 100% 変換することができた。

B-1) 学術論文

X. ZHANG, H. FUJII, K. M. MATERA, C. T. MIGITA, D. SUN, M. SATO, M. IKEDA-SAITO and T. YOSHIDA, “Regiospecificity of Each of the Three Steps of Heme Oxygenase Reaction from Hemin to *meso*-Hydroxyhemin, from *meso*-Hydroxyhemin to Verdoheme, and from Verdoheme to Biliverdin,” *Biochemistry* **42**, 7418–7426 (2003).

M. OHASHI, T. KOSHIYAMA, TAKAFUMIUENO, M. YANASE, H. FUJII and Y. WATANABE, “Preparation of Artificial Metalloenzymes by Insertion of Chromium(III) Schiff Base Complexes into Apomyoglobin Mutants,” *Angew. Chem., Int. Ed.* **42**, 1005–1008 (2003).

R. DAVYDOV, T. MATSUI, H. FUJII, M. IKEDA-SAITO and B. M. HOFFMAN, “Kinetic Isotope Effects on the Rate-Limiting Step of Heme Oxygenase Catalysis Indicate Concerted Proton Transfer/Heme Hydroxylation,” *J. Am. Chem. Soc.* **125**, 16208–16209 (2003).

R. DAVYDOV, J. SATTERLEE, H. FUJII, A. SAUER-MASARWA, D. H. BUSCH and B. M. HOFFMAN, “A Superoxo-Ferrous State in a Reduced Oxy-Ferrous Hemoprotein and Model Compounds,” *J. Am. Chem. Soc.* **125**, 16340–16346 (2003).

B-3) 総説、著書

M. IKEDA-SAITO and H. FUJII, “EPR Characterization of the Heme Oxygenase Reaction Intermediates and its implication for the Catalytic Mechanism,” in *Paramagnetic Resonance of Metallobiomolecules*, J. Telesr, Ed., ACS Book Series; Washington, pp. 97–112 (2003).

B-4) 招待講演

H. FUJII, “¹³C-NMR Signal Detection of Iron Bound Cyanide Ions in Ferric Cyanide Complexes of Heme Proteins,” 生物無機ミニシンポジウム, 岡崎, 2003年8月.

C) 研究活動の課題と展望

これまで生体内の金属酵素の構造と機能の関わりを 酵素反応中間体の電子構造から研究してきた。金属酵素の機能をより深く理解するためには、反応中間体の電子状態だけでなく、それを取り囲むタンパク質の反応場の機能を解明することも重要であると考え。これまでの基礎研究で取得した知見や手法を活用し、酵素タンパクのつくる反応場の特質と反応性の関係を解明していきたいと考える。さらにこれらの研究成果を基礎に、遺伝子組み替えによるアミノ酸置換の手法を用いて、金属酵素の機能変換および新規金属酵素の開発を行いたい。

北川 禎 三 (教授) (分子動力学研究部門兼務)

A-1) 専門領域：振動分光学、生物物理化学

A-2) 研究課題：

- a) 蛋白質の超高速ダイナミクス
- b) タンパク質高次構造による機能制御と紫外共鳴ラマン分光
- c) 生体系における酸素活性化機構
- d) 金属ポルフィリン励起状態の振動緩和及び構造緩和
- e) 振動分光学の新技术の開発
- f) 呼吸系及び光合成反応中心における電子移動/プロトン輸送のカップリング機構
- g) NOレセプター蛋白の構造と機能
- h) タンパク質のフォルディング/アンフォルディングの初期過程
- i) センサーヘム蛋白質のセンシング及び情報伝達機構
- j) DNA フォトリアーゼのDNA修復機構の解明
- k) β_2 ミクログロブリンのアミロイド形成機構の解明

A-3) 研究活動の概略と主な成果

時間分解共鳴ラマン分光法と赤外分光法を主たる実験手法とし、反応中間体や励起状態のように寿命の短い分子種或いは顕微鏡サイズの蛋白質構造体の振動スペクトルを観測することにより、反応する分子の動的構造や会合による高次構造変化を解明して、構造と機能との関係を明らかにする研究を進めている。扱う物質としては金属タンパク質とアミロイド化蛋白質が主で、次のように分類される。

- a) ピコ秒時間分解ラマンによるタンパク質超高速ダイナミクス。ミオグロビンCO付加体の光解離・再結合過程をピコ秒可視ラマン分光で追跡した。The Chemical Records第1巻にそのまとめ論文が掲載されている。時間分解紫外共鳴ラマンも同時に調べている。フィトクロムの研究では水谷助手が井上賞を受賞した。1997年には、水谷助手(現神戸大助教授)のミオグロビンのヘム冷却過程の研究成果が雑誌*Science*に掲載された。水谷博士はその一連の研究が評価されて森野研究奨励賞を受賞した。光合成反応中心タンパク等も取り扱っている。現在は、小分子を検出するセンサー蛋白のセンシング及びシグナリング機構の解明の研究を展開しつつある。
- b) タンパク質高次構造による機能制御と紫外共鳴ラマン分光。ヘモグロビンの4次構造を反映するラマン線を見つけ帰属した。また200 nm付近のレーザー光でラマン散乱を測定できる実験系を製作し、タンパク質高次構造の研究に応用した。1分子が約300残基からなるタンパク分子中の1個のチロシンやトリプトファンのラマンスペクトルの抽出に成功し、それが4次構造変化の際にどのように変化しているかを明らかにした。
- c) 生体系における酸素活性化機構。 $O_2 \rightarrow H_2O$ を触媒するチトクロム酸化酵素、 $O_2 \rightarrow H_2O + SO$ を触媒するチトクロムP-450、 $H_2O_2 \rightarrow H_2O$ を触媒するペルオキシダーゼ等のヘム環境の特色、その反応中間体である高酸化ヘムの $Fe^{IV}=O$ 伸縮振動の検出等、この分野の国際的フロンティアをつくっている。小倉助手(現姫工大教授)のチトクロム酸化酵素による O_2 還元機構の研究は1993年の化学会進歩賞受賞の荣誉に輝いた。その研究成果が「分子細胞生物学」第4版(H. Lodishら著、野田春彦ら訳、東京化学同人)のような教科書に掲載されるにいたっている。また総研大生でこ

の仕事をしていた廣田君(現京薬大助教授)は井上賞を受賞した。

- d) 金属ポルフィリン励起状態のダイナミクス。ピコ秒時間分解ラマンが現在の仕事の中心、振動緩和の測定で振動エネルギー再分配に新しい発見をして1999年に*J. Chem. Phys.*に印刷された。ポルフィリンの一重項、三重項励起状態をナノ秒ラマンで調べる一方、金属ポルフィリンダイマーの励起状態 π - π 相互作用をピコ秒ラマンで見つけた。数ピコ秒で起こる振動エネルギー再分布にモード選択性もみつけて、BCSJのAccount論文として掲載されるにいたっている。
- e) 新しい原理を用いたフーリエ変換ラマン分光計の試作、及びCCDを用いたスキャンング・マルチチャンネルラマン分光器の試作、紫外共鳴ラマン用回転セル、酵素反応中間体測定用フローラマン装置の製作、ナノ秒温度ジャンプ装置の製作、ダイオードレーザーを光源とする高感度赤外分光法の開発、高分子量蛋白質の高分解能紫外共鳴ラマンスペクトル測定装置の製作、サブナノ秒時間分解紫外共鳴ラマン測定系の製作。
- f) 有機溶媒中のキノン、及びその還元体の紫外共鳴ラマン分光とバクテリア光合成反応中心タンパク中のキノンA、Bの共鳴ラマンスペクトルの観測。キノンの中性形、電気還元したアニオン形のラマンスペクトルの溶媒依存性の解明、同位体ラベルコピキノンの解析に向かっている。キノンを電子供与体とする呼吸系末端酸化酵素であるチトクロム bo についても研究を進めている。
- g) ウシ肺から可溶性グアニレートシクラーゼを単離・精製し、その共鳴ラマンスペクトルを観測した。反応生成物のサイクリックGMPがNOの親和性を制御することを初めて指摘した。この研究を行った院生の富田君(現東北大助手)は1997年度の総研大長倉賞、及び1998年度井上賞を受賞した。CO結合体に2種の分子形があり、YC-1のようなエフェクターを入れると分子形は1種類になり、活性は200倍近くなる。そのCOは普通の測定条件では光解離しないように見え、YC-1無しの場合と様子が異なる。昆虫細胞を用いて本酵素を大量発現させ、その共鳴ラマンスペクトルを調べる方向に研究を展開中。
- h) ナノ秒温度ジャンプ法を用いてウシのリボヌクレアーゼAの熱アンフォルディングのナノ秒時間分解ラマンの測定に成功。タンパク質のナノ秒温度ジャンプでは世界で初めてのデータである。高速ミキシングセルを用い、アポミオグロビンのマイクロ秒域のフォルディング中間体を紫外共鳴ラマンで検出する事に初めて成功した。
- i) 環境因子としてCO、NO、 O_2 等の2原子分子を特異的に検出し、合目的の生理的応答をつくり出すセンサー蛋白質のうちでヘムをもつものに対象を絞り、各蛋白質が2原子分子を識別するメカニズム、検出後にそれを機能発生部位に伝達するメカニズムを時分割紫外共鳴ラマン分光法を用いて明らかにする。大腸菌のDos、細菌のHemATについて調べた。
- j) DNAの損傷を受けた部分を光の作用で修復する酵素を大腸菌でクローニングし、それを大量発現する。その蛋白に補酵素であるFADやMTHFを結合させた時の蛋白の構造変化を紫外共鳴ラマン法で検出すると共に、その蛋白が損傷を受けたDNAと相互作用する様子を調べる。更にそこへ青色光を照射してDNAが修復される途中の構造を検出して、そのメカニズムを明らかにしていく。
- k) 免疫蛋白の抗原結合部位に相当する β_2 ミクログロブリンは透析治療を長く続けた患者の血液中に集積され、突然アミロイド線維を形成する。そのアミロイド線維の顕微偏光赤外スペクトルを測定して、線維中の蛋白分子の構造を論じる。また、紫外共鳴ラマン分光法によりこの分子のモノマーとフィブリル状態の構造の違いを明らかにする。この蛋白の#11-21残基でフィブリルをつくらせたものについて既に報告したが、#20-41残基や#76-91残基、それらの混合物でつくったフィブリルについても測定を進め、高次構造形成に誘導減少があるかどうかを明らかにする。

B-1) 学術論文

- Y. MIZUTANI and T. KITAGAWA**, “Vibrational Energy Relaxation of Metalloporphyrins in a Condensed Phase Probed by Time-Resolved Resonance Raman Spectroscopy,” *Bull. Chem. Soc. Jpn.* **75**, 623–639 (2002).
- T. UCHIDA, Q. HE, C. Y. RALSTON, M. BRENOWITZ and M. R. CHANCE**, “Linkage of Monovalent and Divalent Ion Binding in the Folding of the P4-P6 Domain of the *Tetrahymena* Ribozyme,” *Biochemistry* **41**, 5799–5806 (2002).
- T. UCHIDA, K. TAKAMOTO, Q. HE, M. R. CHANCE and M. BRENOWITZ**, “Multiple Monovalent Ion-Dependent Pathways for the Folding of the L-21 *Tetrahymena Thermophila* Ribozyme,” *J. Mol. Biol.* **328**, 463–478 (2003).
- N. C. MAITI, T. TOMITA, T. KITAGAWA, K. OKAMOTO and T. NISHINO**, “Resonance Raman Studies on Xanthine Oxidase: Observation of the Mo^{VI}-Ligand Vibration,” *J. Biol. Inorg. Chem.* **8**, 327–333 (2003).
- H. ARII, Y. SAITO, S. NAGATOMO, T. KITAGAWA, Y. FUNAHASHI, K. JITSUKAWA and H. MASUDA**, “C–H Activation by Cu(III)₂-O₂ Intermediate with Secondary Amino Ligand,” *Chem. Lett.* **32**, 156–157 (2003).
- M. MIZUNO, H. HAYASHI, S. FUJINAMI, H. FURUTACHI, S. NAGATOMO, S. OTAKE, K. UOZUMI, M. SUZUKI and T. KITAGAWA**, “Ligand Effect on Reversible Conversion between Copper(I) and Bis(μ -oxo)Dicopper(III) Complex with a Sterically Hindered Tetradentate Tripodal Ligand and Monooxygenase Activity of Bis(μ -oxo)dicopper(III) Complex,” *Inorg. Chem.* **42**, 8534–8544 (2003).
- D. OKUNO, T. IWASE, K. SHINZAWA-ITOH, S. YOSHIKAWA and T. KITAGAWA**, “FTIR Detection of Protonation/Deprotonation of Key Carboxyl Side Chains Caused by Redox Change of the Cu_A-Heme *a* Moiety and Ligand Dissociation from the Heme *a*₃-Cu_B Center of Bovine Heart Cytochrome *c* Oxidase,” *J. Am. Chem. Soc.* **125**, 7209–7218 (2003).

B-4) 招待講演

- 北川禎三, 「生物無機化学の概要と呼吸酵素による酸素還元のみカニズム:時間分割共鳴ラマン分光法による解明」, NASDA セミナー, 宇宙研筑波センター, 2003年4月.
- 北川禎三, 「共鳴ラマン分光法によるガスセンサー蛋白の特異的センシングメカニズムの解明」, 生理研研究会, 岡崎, 2003年5月.
- 北川禎三, 水谷泰久, 「溶液中および蛋白中の金属ポルフィリンの振動緩和」, 岡田 正 教授退官記念講演会, 大阪, 2003年5月.
- 北川禎三, 「分子の振動を観測してタンパク質の働くメカニズムを明らかにする」, 安城市シルバーカレッジ, 安城市民会館, 2003年6月.
- 北川禎三, 「からだで活躍する金属イオン」, 岡崎市民大学, 岡崎市民会館, 2003年8月.
- 北川禎三, 「ラマン分光学による酵素構造と機能解析」, 第39回分光学会夏期セミナー, 幕張メッセ国際会議場, 2003年9月.
- T. KITAGAWA**, “Oxygen Activation Mechanism of respirator terminal enzymes Probed by time-resolved resonance Raman Spectroscopy,” Guest professor lecture, Key Laboratory for Molecular Enzymology and Engineering of Ministry of Education, Jilin, Chungchung, January 2003.
- T. KITAGAWA**, “Time-resolved Resonance Raman Study on Vibrational Energy Relaxation of Metalloporphyrins in Solution,” Guest professor lecture, Dept. of Physics, Hennan University, Henan, January 2003.

T. KITAGAWA, “FTIR Detection of Protonation/Deprotonation of Key Carboxyl Side Chains Caused by Redox of the Cu_A-heme *a* Moiety and Ligand Dissociation from the Heme *a*₃-Cu_B Center of Bovine Heart Cytochrome *c* Oxidase,” Intl. Conf. On Vib. Spectrosc. of Proteins, Freiburg (Germany), May 2003.

T. KITAGAWA, “Resonance Raman study on mechanisms of specific ligand recognition and signal transduction of sensory heme proteins,” Molecular Structural Basis of Information Reception and Transfer, The Science Council of Japan, June 2003.

T. KITAGAWA, “Resonance Raman studies of xanthine oxidase,” Gordon Res. Conf. On Molybdenum & Tungsten Enzymes, Kimball Union Academy, NH (U. S. A.), June–July (2003).

T. KITAGAWA, “Structural and vibrational relaxation of carbonmonoxymyoglobin and its mutant following photolysis of CO,” Telluride Workshop Protein Dynamics, Telluride, Colorado (U. S. A.), July 2003.

T. KITAGAWA, B. PAL., T. OHTA, Z. LI, S. TAKENAKA and S. TSUYAMA, “Formation of unphotodissociable CO-heme adduct in soluble guanylate cyclase,” 11th Intl. Conf. Biol. Inorg. Chem., Cairns (Australia), July 2003.

T. KITAGAWA and Y. MIZUTANI, “Vibrational and structural relaxations of metalloporphyrins and heme proteins probed by time-resolved resonance Raman spectroscopy,” XIIth Chinese National Conference on Light Scattering, Dalian (China), October 2003.

B-6) 受賞、表彰

北川禎三, 日本化学会学術賞 (1988).

小倉尚志, 日本化学会進歩賞 (1993).

水谷泰久, 井上研究奨励賞 (1995).

廣田俊, 井上研究奨励賞 (1996).

北川禎三, 日本分光学会賞 (1996).

富田毅, 総研大長倉賞 (1997).

富田毅, 井上研究奨励賞 (1998).

水谷泰久, 森野研究奨励賞 (2001).

北川禎三, 日本化学会賞 (2002).

B-7) 学会および社会的活動

学協会役員、委員

IUPAC Associate Members of Commission on Biophysical Chemistry (1996. 1-).

日本分光学会東海支部幹事 (1986.4-1991.3).

日本分光学会評議員 (1987-).

日本化学会東海支部代議員 (1986-1988).

日本化学会東海支部幹事 (1988-1990).

日本化学会化学展92 企画委員会副委員長 (1991).

日本化学会賞推薦委員 (1994).

日本化学会学会賞選考委員 (1998), 委員長 (1999).

日本生化学会評議員.

日本化学会東海支部副支部長 (1999).
日本化学会東海支部支部長 (2000).
中部化学連合討論会実行委員長 (2000).
日本化学会東海支部監査役 (2001-2002).
日本化学会理事 (2002-2003).

学会の組織委員

International Conference on Raman Spectroscopy, International Steering Committee (1988-1994).
International Conference on Time Resolved Vibrational Spectroscopy, International Organizing Committees (1989-).
11th International Conferens on Photobiology, Symposium organizer (1992).
Vth Intrl. Conf. on Time-resolved Vibrational Spectroscopy(Tokyo), Local Organizing Committee (1991).
Symposium on Recent Developments in Vibrational Spectroscopy, International Chemical Congress of Pacific Basin Societes (one of organizers).
Co-organization: US-Japan Symposium on “Ligand Binding to Myoglobin and Hemoglobin” Rice University, Houston, March, 1-5 (1997).
Co-organization: US-Japan Symposium on “Proton Coupled Electron Transfer” Kona,Hawaii, Nov. 11-15 (1998).
Co-organization: Symposium in International Chemical Congress of Pacific Basin Societies “Raman Spectroscopy: Coming Age in the New Millennium” Hawaii, Dec 14-18 (2000).
Co-organization: 10th International Conference on Time-resolved Vibrational Spectroscopy, Okazaki, May 21-25 (2001).
Organizer: 2002 IMS COE Conference “Dynamical Structures and Molecular Design of Metalloproteins,” Nov. 18-21 (2002).
Organizer: AsBIC-1 “The First Asian Meeting of Bioinorganic Chemistry,” Okazaki, March 7-10 (2003).
Coorganization with J. Friedrich and R. J. D. Miller; Telluride workshop: Protein dynamics, Telluride, Colorado, USA, July 14-18 (2003).
Organization: Symposiium on Sensory Proteins, in 11th ICBIC, Cairns, Australia (2003).

文部科学省、学術振興会等の役員等

文部省学術審議会科研費分科会理工系小委員会委員 (1997-1998).
日本学術会議化学研究連絡委員会委員 (1997-1999).
文部省学術審議会専門委員会科研費審査委員 (1991-1993, 1995-1998, 2000-).
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員 (1992-1993, 1994-1995, 1996-1997, 1998-1999, 2000-2001).
日本学術振興会国際科学協力委員会委員 (1998-2000).
日本学術振興会未来開拓事業委員会複合領域専門委員 (1998-2001).
科学技術庁研究開発局評価委員 (1994).
さきがけ研究アドバイザー (生体分子の形と機能:2000- ,光と制御:2003-).
大学評価 工学部評価専門委員 (2002-2003).
文部科学省21世紀教育・研究COE選考委員(化学・材料部門)(2002).

学会誌編集委員

Journal of Physical Chemistry, Advisory Board (1993-1997).

Chemical Physics, Advisory Board (1993-).
Journal of Molecular Liquids, Editorial Board (1993-).
Asian Journal of Physics, Advisory Board (1991-).
Biospectroscopy, Editorial Board (1993-).
Journal of Raman Spectroscopy, Advisory Board (1995-).
Journal of Biological Inorganic Chemistry, Advisory Board (1995-1997).
Journal of Biological Inorganic Chemistry, Editorial Board (1999-2002).
Journal of Inorganic Biochemistry, Editorial Board (2001-).
Chemistry Letters, 編集委員 (2003-2004).

科学研究費の研究代表者、班長等

重点研究「生物無機」班長 (1991-1993).
総合研究(B)班長 (1994, 1995).
重点研究「生体金属分子科学」領域代表者 (1996-1999).
特定領域研究(A)「未解明鍵物質」班長 (2000-2002).
基盤研究(A) (2001-2002).
基盤研究(S) (2002).
特別推進研究 (2002-).

B-8) 他大学での講義、客員

北川禎三, 総研大光科学専攻, 「Vibrational Spectroscopy」, 2003年12月.

C) 研究活動の課題と展望

- a) タンパク質高次構造の速いダイナミクスとそのセンサー蛋白質における重要性: 時間分解共鳴ラマン分光
- b) 生体NOの合成及び反応機構: 時間分解赤外分光
- c) 蛋白質の分子内情報伝達機構の構造化学: 紫外共鳴ラマン分光
- d) チトクロム酸化酵素における電子移動とプロトン輸送とのカップリング機構の解明
- e) 生体における酸素活性化機構
- f) ヘムを含むセンサー蛋白質のセンシングと機能実行メカニズム
- g) ナノ秒温度ジャンプ装置の制作とそれを用いた蛋白質フォールディング/アンフォールディングの追跡
- h) タンパク質の高感度顕微赤外分光: β_2 ミクログロブリンを材料とし, アミロイド化による配向フィブリルの偏光赤外測定により, 蛋白質の2次構造を明らかにすると共にフィブリル化のきっかけをつくるものを探す。
- i) DNAフォトリアーゼによるDNA修復機構: 大腸菌のフォトリアーゼをクローニングし, その蛋白質を大腸菌で作らせて, 紫外共鳴ラマンスペクトルを調べる。補酵素結合による蛋白質の構造変化, DNAとの結合様式, 青色光照射による光修復機構の解明を目指す。

以上のテーマを中心に時間分解振動分光の手法をシャープに生かした研究を進めて行きたい。